

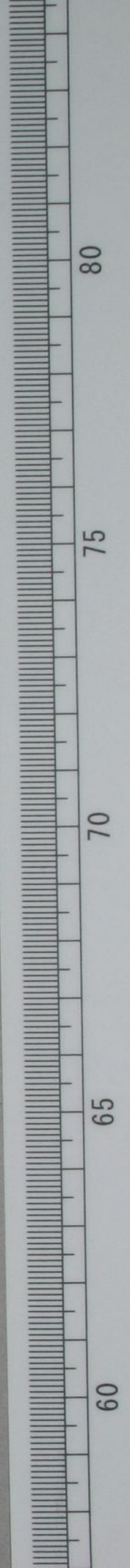


儀禮七卷上
上

二
畏



5
1907
1





鬼子夜句集

俳諧七車

攝都書肆 高橋興文堂梓



乳ぶさ我振るわづみ花よきなり
して指さすも天柱のはらけハあそ
うにやうてきかゆとらふもれ出てそ
れあしたのまぢりなやまぢりな
よわゆるはらけとらふもれハ
寔又えはらけとらふもれハ
あそびたのまぢりなやまぢりな
卯の花乃白敷えとらふもれハ
あしたのまぢりなやまぢりな

5. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

事はく免いぬかなのきしんは
さうさや先ぢわらふものほん
門松やうらまわぬ武彦めよ
火の敷やう徳棚れまやう
二年れ鏡をうぬの花よせう
喜之や泣もくふさねく起
とよのささるあしむれ年まこくは
かきふらうちうまをささく朝れ
二十七年のうらま。

花といふと 売れ玉のうら
まをむ初日をさのまじや
や横よまゆれまの花や
赤儀のよまき初日れ梅
いよあけよあそ秋の田うら
は年えらぬ
けうらにまをささるあし
たれ
さあやまゆれ初日
はよまゆれ初日

祇園の社よりのうら

あらんけとよして暮らしてゆく

夕陽の光をうけて
秋の風をうけて

あけきりし十種も一色よりの後

はたよりゆきの

朝の光をうけて

あけきりし十種も一色よりの後

あけきりし十種も一色よりの後

あけきりし十種も一色よりの後

梅のほれそへて

梅のほれそへて

梅のほれそへて

○正と早旦とトかまの列のうらやうやう
句集のうらやうやう

あけきりし十種も一色よりの後

あけきりし十種も一色よりの後

あけきりし十種も一色よりの後

あけきりし十種も一色よりの後

あけきりし十種も一色よりの後

此連中ハ鬼堂才彦（其の）徳天君西行
万海瓶等七吟なり

上巳

さら句めけてたけわたるも若くもを侍りし

子成たつぬる母の細きて花さうりよき
かきききききききききききききききき

きききききききききききききききき

きききききききききききききききき

きききききききききききききききき

きききききききききききききききき

きききききききききききききききき

る親独り

アハ泣ッてみれあ〜〜〜〜〜

西名此人戸塚のねのあとしてまう〜
よまを双葉をまう人うまよまは〜〜〜

ねの本とりをまうた〜〜〜〜〜

月あつて杖園通はあ〜〜〜

〜〜〜〜〜本厚の里り餅ふ〜〜

三月十五

小る降ふと〜〜〜倒の火影〜〜

居るま〜〜〜〜〜

うらまえて隣子も終——初日親
井戸堀きまのうらま布 ね乃らな

うらまをたに内花毒うな人たり

此節の大補完成せしむるや文乃由は
花を入らばこれ一よる
九字の状う花のう白きなり
うらまよりと花をうらまの終めなり

又らうや わたしの花のよき事
うらまの まるき事なり

難る歌終末の信乃庵より

雄うはる度うちまてき佛うら
ほのゆきうに人乃らうふ

まらぬあまの事并ううらまを

下略 ○右句並しハキ終るうらまを
まらぬうらまをうらまは
うらまをうらま

伏うれハ江戸もゆきうまのる
苗げや隠居へゆくまをた

正月十日 七字の一回目

まらうらまお一時たれぬ

二月廿五日 終末のうらまを
廿日まらうらまを

春の日の光を
あつた

あつた

松乃松
勇士の松

うらやま

あつた

十のうらやま

あつた

膝合を 柳の若中哉
あつた

あつた
春日の光

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

まて可きしらんいどより 春乃る

初春 石所 祐富 上野のうねをゆかし

まとうあるはるのあはれこや 春のあ

春のよれこころはささする時々の

六十賀は花は万華はなと
ひまわり

幾春を花のこころはなすの友

そとて縁をまうけき
ようらいははつたあし 時あや

春の花のあゆみ程よれ春日よれ

月うはる下花はむせりよれよれ

鳴梅

春啼て木のほろろもさるのを

大舞の絵よ

任真くくく家も田をくくも 春の歌

大坂や岩の水音納の
絵よあやよ

うつれ、やの隣よあさの花

笛をうててさそ
いひあはれはるの絵よ

春の香んらうの袖より原氏を

まの九回うせしうらよめ
榎木の枝をたよりりに

かしのちやそらの初枝るちりり

小町の松よ

あらしむきちりりもゆし花の色

おのゝとせしむ小町の松よ

あらしむきちりりもゆし花の色

七十賀よ

はら杖の志ちりりあゆむて、さき

一切経巻の松よ

梅のちや衆生もさき軒の松

八十賀よ

はら杖の志ちりりあゆむて、さき

おのゝとせしむ小町の松よ

松よ

玉瓜の金をはりむきり

月次の流落せしむし

初まのちやちりり

善いさ人のそとれ初

善いさ人のそとれ初

さしやれゆりよ甘やささる麻

たらしむささる麻の草生るささるささるささるささる
ささるささるささるささるささるささるささるささる

五月十日信川後箱
あけのぼりの時

七夕は笑う様さ〜 初さ〜

日十の末人の
老母九十年

そのとや 百廿味も九十〜

日サりの叔 芳室定一りて

雨水と心等れ 林〜 風の雛

あまの垣
後を

云々のさして 出あて 悔〜

下町園形次の人 大を徳有
〜の

雨影、きぬぬ 乃 花書か

いかにのほれき
〜

れをや〜 神の事知れぬ 縁

後乃 魚の 神〜 花衣

〜と味線
わさね〜

美乃 乃 虎をけり〜 花衣

神祇の事れある
〜

花垣や 吾と 和支れ 八きし〜

川〜

岸陰やうらやま 汐干の淡海

うらやまのうらやま

水鳥月や伝えの川 春の水鳥音
うらやまや 汐干のうらやま
桐芦や 汐干のうらやま

七車舟の二

夏歌

うらやま、樹もあはれ 汐干のうらやま
かゝるうらやま、汐干のうらやま

うらやまのうらやま
うらやまのうらやま

夕とん、鮎の腹見る川 汐干の
うらやま、夏の蛙、汐干のうらやま
梵天のうらやま

白くも 汐干のうらやま、
志葉瓜

神口はう大和子侍やと田舎
歌筆の花はれはあそびの妻はう

芝柏東武の行を

田子飯は日永中歌をうら

又ゆきをねえ

昔原やふくち歌は木の音

吾想

意の所はれはうはあそびはう

旅のあそびはう人の夢はなる夜

はせらるる毎事

松や舟ふくちかたの木瓜

坂上青園をうて小倉をうてはう

秋もさや小倉をうてはう

そのねねまはう

ねえあけや村はうはう

仲五のれまはうはうはう

さうはうはうはうはう

はうはうはう

夕と申す卒於はあつたるる多し其花
岸にさあはぬとあつたるる多し

己夫よえい
ささや

るる此のうら花にさ水鏡

山下に雲流るあつたるる多し
あつたるる多し其勢はあつた
るる多し

水よこせ勢てさるる乃花

流流のささくも小樹の時

花よ新をささくも味を

ふ力十のささくも味を
轍士之白百丸各うちうちいってあつたるる多し

此もささくも味を
後をささくも味を
せさくも味を

かやそのはほのく和鳥帽子

五月廿六日雨あつたるる多し

年ふれは度もなつたるる多し

水きり月サあつたるる多し
あつたるる多し

あつたるる多し

孝玄よえい

るる衣ささくも味を

九月二日
あつたるる多し

九十一と二きりぬ それも反衣

妻のたよりをばかす

よもさきれぬやまゝとて 偽・光

美佐國が納りの時

おまぢへのきもたへそ 乃 反本立

とん女の伝へてあつて
人のきしつゝん

秋も来ぬ 其人乃 圓れそまゝ

まがらうまきこゝろ

盗人の塚も ちぢぢく 夏の家

加納よまはしのありき
時よゆつてはねのしり

まののへ 何も 加納のき田

中村氏 諸の件よまはしぬ

まののへ いたはよらん 秋もや

ふ月の時よまはし

第八種よ 中乃 ちぢぢ

金毛亭よまはし

るそ 障るらぬ 橋の 起ても

井の雨よ

とら 袖も ちぢぢ 降一 洞

一山院常念佛

あゝ清く 証の音もあゝ 一山院

霊らるる

やみや 庭り 水よ 流るる

大坂の位も 鏡をよみて 一山院をきく
てはら 夢よの 向うて 夢よ 夢よ 一山院
より 不境 二階 附て 向う 庭り 一山院
しを あそれよ 一山院

なつそれハ 空日 一山院

五月五日

大坂の位下

夏よ 一山院 初 一山院 大坂

己夫うきさ 隣よ 位て 一山院 考 位 考
を 向う 一山院 証の音 一山院 一山院

夏よ 一山院 一山院 一山院

出陣 位 一山院 一山院 一山院
一山院 一山院 一山院 一山院

卯の花 一山院 一山院 一山院

長ね 無り

夏よ 一山院 一山院 一山院

先夫うきさ 一山院 一山院

五月五日 一山院 一山院

淡如の影宅より絶語あり

花や咲きまねにさへえさ

祇園の御無洗よ

鳳凰のいとこいぬわらう 名所いぬ

きまの侍女の元乃教わうとて山寺の西方に
花うらむををらまはせしやうとて卯の花月
ころかのまよはせし

ふはささ浮きまをわくし 更衣

思惟人のあましき御無洗

妻の種もさくむとせきは法の形

まねる人のまねく
まねるまねより

まよふに枇杷も泣きまよふ

五月十日 蝶屋より
十九日 二おとれ

舟の穂はわらう ねるのまはし

まよふまよふ
舟中より

けしき ちかみ猫の床あつ

花をさくむけとまらぬの紫車

五月十日 舟中より

トヨ屋ぬ人のうらやみさ

不二

あまのつとむらひをたぐひて
まほねをたぐひて

まほねをたぐひて
まほねをたぐひて
まほねをたぐひて

おいとぬちのたぐひて
おいとぬちのたぐひて

橋のたぐひて
橋のたぐひて
橋のたぐひて

橋よ今をわらへ
橋よ今をわらへ

おいとぬちのたぐひて
おいとぬちのたぐひて
おいとぬちのたぐひて

風よなほくくくく
風よなほくくくく

卯月のま
卯月のま

題黄香二

床まらう父よ骨打あつた
床まらう父よ骨打あつた

枕をたぐひて

おいとぬちのたぐひて
おいとぬちのたぐひて

枕をたぐひて

おいとぬちのたぐひて
おいとぬちのたぐひて

わがやうなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらなうらな

人の心はうらなうらなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

軽人の心はうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

端午

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらな

あつちの山はよらうなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらな

あつちの山はよらうなうらなうらなうらな

吾はとらひ一人日江の原うは位へ花白
ひ月まゆつたる時くおつらう事とを
うらなひとこししゆ月の新居をまき
うたへ移る新宅のまゆらたおつら

花とまゆの中垣のし 梨子の意

一礼一回

足元のなきは 首途より 夏の光

小塔そのよ水 築き
うたへ移る

青葉の樹も あはれさ 居るの郷

松の村まよ
ほらまゆらまゆら

あはれさ 松のあはれに 春の光

まゆらとらひ一人はとらひ
まゆらとらひ

あはれさ 松のあはれに 春の光

まゆらとらひ一人はとらひ

あはれさ 松のあはれに 春の光

まゆらとらひ一人はとらひ
まゆらとらひ

まゆらとらひ一人はとらひ
まゆらとらひ

あはれさ 松のあはれに 春の光

まゆらとらひ一人はとらひ
まゆらとらひ

あはれさ 松のあはれに 春の光

霊棚や蚊ハ血吸てれておあれく

支枝氏御子困神

出侍の内供をいれを殺し

志とまら鬼と志と侍陣をい

劔御ぬりきく

鳩娘の繩をえくも力あ

美無き

正侍ちるお足の付

併りも是よりと訓く糸瓜

多知名氏印の九有江府を出て伊勢

代ませおんをく

そくくひり又女や菊乃舞の神

利原きよよの別

八月十五夜

叶秋を膝よ子乃たひ有ん

年くくぬ人もあらぬ

をくくくく猿もしな

月次の書

をくくくくくくく

辛卯

くくくくくくくく

七夕

田舎水の湯と成て早のさき相成

九月十日の夜めを待て
病はのしむるさういふ

ほの月入て歌より早乃宛

こはよ位なる野田某の家の許より成て
早乃宛の秋風かきかきて
早乃宛の秋風かきかきて
早乃宛の秋風かきかきて

二里の山より早乃宛

えの嶽あきくつ森のさきろく

怪蛇の伊丹の家や
あつてさういふ

秋晴あきくつ鬼つておめく

いせんおきかつて早乃宛

佛の足は縁鹿をきかかと思ふ
たひなる茶林あきくつ
さきくつ早乃宛

臨様のさきくつ早乃宛

さきくつ茶乃味さきくつ

早乃宛の秋風かきかき

九月十日の夜めを待て

早乃宛の秋風かきかき

きりぎりすのちあはれをわすれぬのち

奥の海とらふ巻よ

花よ月方をそらにいほしよ おのれ

いんし中の秋

老母よいんたれをいよむかすよ

去りゆく似くく おのれ

猿猴の弦よ

ち所柿のさしあつくとあつたよ

やがておれ字と後田

幸田のきよきよとちとちの おのれ

ささきと おのれ

おのれ おのれ

あつた おのれ

きよきよ おのれ

蝉よ おのれ

ささき おのれ

きよきよ おのれ

昆陽池

おのれ おのれ

説書抄の おのれ

秋きよのむらさき月より満ちて

七月の朝のよき

卯のよきや浦のよき

おとろけぬれまはりなると
まよひのほろけぬれまはり

八月のよきよ秋きよのよき

八月十五日

身はしらを最中へまはりて

早陽

久しや朝の朝の朝の朝の朝

独り坐る朝 子句の意

早と遅とをとりてはむら

そ、ろなるにむらむら

まらむらむらむらむらむら

下略

秋きよのむらさき月より満ちて

卯のよきや浦のよき

おとろけぬれまはりなると
まよひのほろけぬれまはり

八月のよきよ秋きよのよき

路通稿況無り

友とを伴おも文車に秋の暮
しりやうとやうらう、秋乃とれ

九月廿三日の困り人
ねんえんまきしよとて

秋とれそ神まをるをど身はいりこ
芋とやみのかうほらう、さる月

九月十日 漢水月次の
流き無りよ

あつまぬのはあつぬを修らふ
らと文車のえんまきし
まきしを無り入るる女のまきし

秋ねや 意よはらうに 秋唐のそ

新定宅

しらやうに火袋はよとあおるいれ

九月廿三日の妻
ねんえんまきし

菊のよこしく 垣なきはねんまきし

九月廿三日の妻

度とらに 起く 目をさすはらうらふ

九月十五日

かえん 人の 脱も あまらふ

十月十日の月を

身ハ團より侍むさし 後を侍る

立秋

秋之和 花の初言此にさるる子

旧よりいを世

秋のしづかきのを志袖此にツ柏

七夕

比よあしを侍るや早のさるれ想

中元

菊尾子およそと 西名よふ中元

卯のし

魂くを 湯なれと 瓜なをい

九月十五日

神子よりわらわ

神のりや 奉てさくまわく 尾花哉

十五日 高きくまき

去来はあき乃のよも 秋月んふ

あしと家敷さるや 窓乃月

明なるとは雨氣くもる意乃月
悪癒くとしうよある月えい
影は海よりうをふれ月えい
か^{ヤカ}や月のそ花見水花月
只のねれ夏花可くや月花
くほくたつてわうな一秋の
人^若の妻は方可くもれ
な^若はとくは花もあつ一月は
くほくたつてわうな一秋の

若人未武名句集列

狗川のらりうなふ旅出まぬ

きもり体は又菊をまき
あつてはとくは

紫^若と朝花菊の笑顔山
さ及ういはくしうほくは子白と
門子子七月の末方可くもれ
沈火をこそそ花の力そ

中え二句

わをれをやさよありはこの魂し
霊よ玉清ぬほけよそ秋の露

九月八日江戸より
そつてあつてやせつての秋を
こつてあつてやせつての秋を

新馬の泣くはなはし菊のや
よろこぶ事ありし甲子の許へを
かたれし時をさし
子代正せ菊もさしはれしは

五十加

又あつをてもきき早乃秋

之宅竹東十三回忌よ

神よ玉七つのもつは待ては

七夕

七さしは 庭のまろを早の

十六加

一輪やうけのきれ尾の山うけ

此門まといふを文十換
まのあやのちあ

床のきり 漏りまひるむ信り

佐川氏一秋をり時あや
秋まよてまの句をこあ

うきをのさなうけ白一秋の

葉のこ上協城を
うきをり

葉の戸下入りまのこむ秋の

十三加

春より一野秋の花も奥志有

玉井氏松妻方のさちありて旅まゝ
のまなむけは一向をほろろさける
ゆゑに人
をなむけは一向をほろろさける

望よりせよ子とつらき旅の秋

秋月明白し旅先のゆくは
地の汀にまをさし

たねをむくやうに
まのよけに持てる
きわむよけにむくまへし
ありき

月影やや扉を消さるる如法

ふらぬのり

待たぬとらふ雨なれ馬とらふ

あゝとらふきしゆ

冬部

かきけは後のおきさし
かきけは後のおきさし

腕力廿日ありし

強とらふ伊勢あつちのきし

まをさしは
まをさしは

餅をたのむるは

餅

きしけんは

古く伊勢の作と鳥丸光彦の撰と云ふ
小町の小町の木像をて大詠多於大備光某の
古くわんをてえ祓工一戊子穉月十日記
其り

花のうらもかほひをてきるる花本を

ねた月廿二日
昔花をてては事あり

あ、梅乃身もあうもれ匂しこれ
をうしこれうを買うてかきしめ
丁らるれ及中や耳をのりて居ぬ
ひしとねはそり 冬牡丹

詠洵

花をうはふ火をぬかると火入
あう物と知れはたうし神をう

穉月十日伊勢某空
しそりあり

春のちろろわし初うりてはれ
なんと菊のうらうりてはれ

餅はとるあの子もやうて
うすく無きおしはれ

かた 杵の血をてては餅のほろ

四本堂

春こそうら朝もほよとて

十一月十日 勢多野 野無り
野二子の御用 勢多野 仰高き 成程と

野二子に 厚やう 松より 舟よ 親

十二月 三 勢多野
壬戌 二月 三 勢多野

喜 勢多野 親の 笑 方 や び び び び

おき 一月 十日 不 及 守 守
戸 あり あり あり あり

何 あり と け あり あり あり あり あり

二年の くれ 以下 十三 句

ね あり あり あり あり あり あり あり
帝 勢多野 二年の 春 たる あり あり あり

年 を ま あり あり あり あり あり あり あり
の 日 あり と 周 あり あり あり あり あり あり
と あり あり あり あり あり あり あり あり
年 の 泣 あり あり あり あり あり あり あり
と あり あり あり あり あり あり あり あり
人 あり あり あり あり あり あり あり あり
年 の 慶 あり あり あり あり あり あり あり あり
年 あり あり あり あり あり あり あり あり
年 あり あり あり あり あり あり あり あり

新市より炭

飾

元禄十五年正月十五日
五十年忌 田文

又肉舎してを本座とせ付し
又肉舎してを本座とせ付し
又肉舎してを本座とせ付し

表つらハキム
人の口もつらう
つらうと
つらうと
つらうと

麦焼の湯を流す

時沙を吹乳あそびなれは
時沙を吹乳あそびなれは

駒川の流犯を
枝の陰

翠柏身り

花をもちよん

十二月十三日の夜
此奥の地は

さくわらふよ

花をもちよん

おきこれ美門と

うめつ、一口此の桶をぬきあつみ

江戸に在る時

あまのついでに

高きよと程さう見ゆき 花

詠伯

なほ見えぬ身を詠猿の冬あふれ

よーあつて

空しくあはれぬ花をささぐ城の花車

江原和歌の秋をよほつれつて布袋の詠は
こゝろをほめておぼえつた

春 花や幸あふれ乃花ふとら

詠言の趣意よきを思ひて

花あつてや対面の夜詠言

題大思天

叶つては陽よけかゝるまのふ

詠言の趣意よきを思ひて

うらふはつとつらや冬めい花

まのつとつとつ 挨拶

とや陽のあつてを乃笑ひあ

題王褒

久の清ぬその魂や厚くをり

題 因子 騫

さうひらうらうらきし ちねのま

二年内と之を 二句

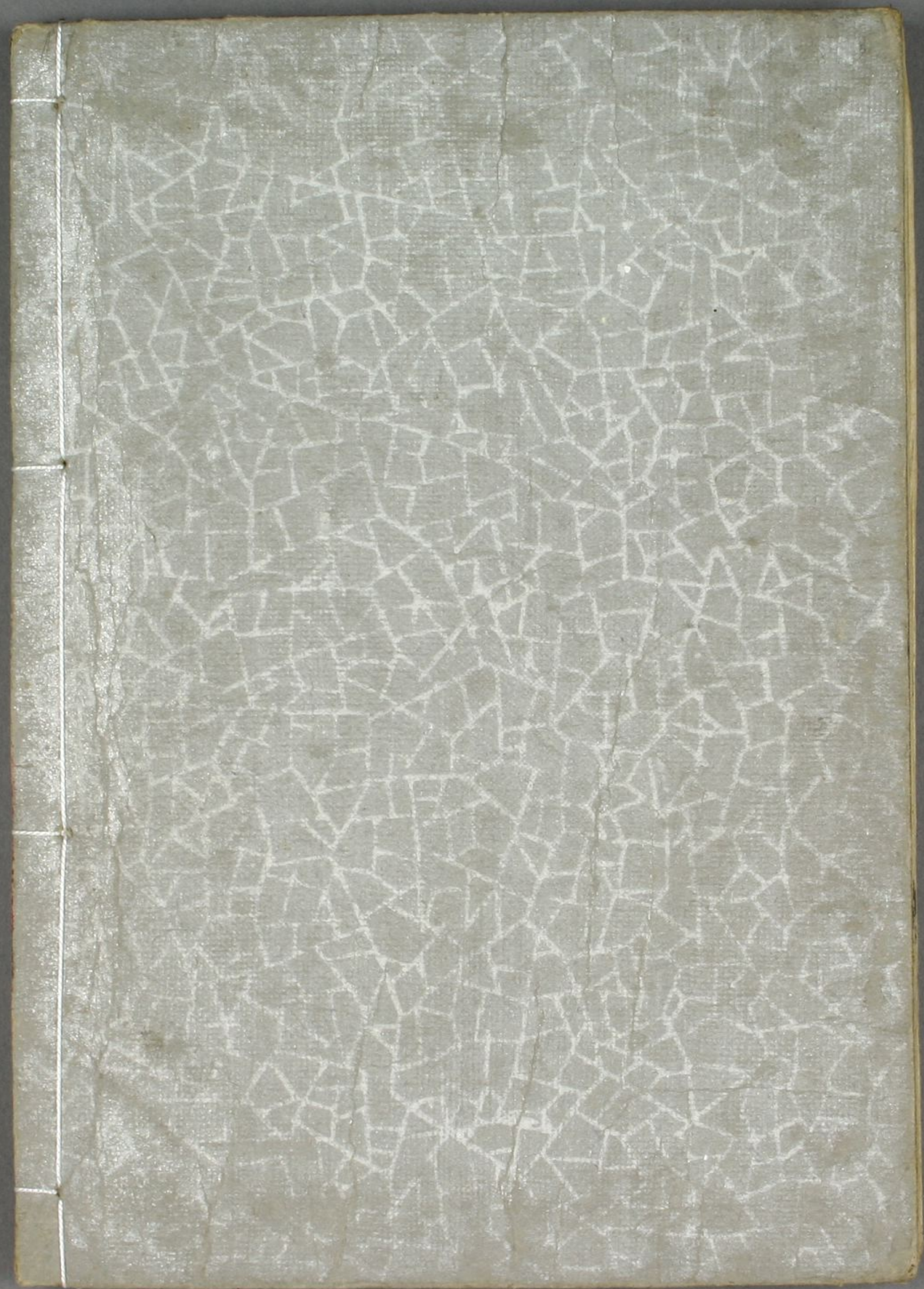
去年よりおととをうまむ二年の内

二年をきむむねも地の角 旧の麻

善を可しよし
まねうらけ

あきみのしきうら 忘れぬまのき

十月廿四日大森に勇二廿年を待てをけ
うたもくお何わうらうら 五甲の都とよみ



鬼力
後句集

俳諧七車

攝都書肆
高橋興文堂
梓

